

【ねがいはましては】

令和2年9月25日

KYOWA SCHOOL

第358号

「信じてやりぬく」

山口真由さん、某テレビ局のモーニングショーで、コメンテーターをなさってから、人気が出てきたようです。経歴がすごい、中学3年生の時に、全国模試で1位をとり、それがきっかけで北海道から東京の高校へ進学、そして東京大学へ、3年生の時には司法試験に合格、首席で法学部を卒業後財務省に勤務、弁護士を経てハーバード大学に留学、2017年には、ニューヨーク州弁護士登録。現在は、東京大学大学院法学政治学研究所博士課程に在籍中。

で、幼少期はどんな生活をされていたのか気になりますよね。

小学校時代は、本が好きで空想好き……。みんなと一緒にワーツ、というタイプではなかったとのこと。ひとりで登下校時も本を読んでいたそうです。あだ名が二宮金次郎。当時の目標が、これまたすごい……。小学校1年生当時から1日1冊読もうと目標を立てていたそうで、学校の図書館にある本を卒業までに全部読むことだったそうです。しかしそれは叶わなかったそうですが……。

次、青春時代に情熱を注いだものは、という質問の答えが驚き……。「勉強ですかね。青春時代は自分がどれだけの時間を勉強に注ぐかということに情熱がありました。自分の24時間の中をどれだけ勉強に捧げるかと。司法試験の勉強には1日19時間半とか勉強していました。(中略)好きなんです。答えの出ない問題をずっと考えるのが」

次も驚きです。「私、1日に8冊とかは読みます。自然に。頑張るとかじゃなくて楽しいなと思いつつながら。東京から大阪に行く新幹線の中で、2時間30分とかでは勉強しなきゃと思ったら4冊くらいは読みますね」(中略)「私、運動神経は悪かったですけど、体力はあったみたいで、ひたすら椅子に14時間くらい座っているのも平気です」

読むのは速いが、理解するのはまた別のことだそうです。ものがたりなどは、平たくストーリーを追っていく読み方なのに対し、重要なことが書いていないか見分けるような読み方もあるそうです。この本はどう読もうかと、読む前にいちいち考えているそうです。

高校では順位がなかったそうです。順位を競わせるより、自主性を重んじる高校だったようで、興味のあることを先生に相談すると、どんどん新しいことや発展的なことを教えてもらえたそうです。ちなみに高校は、国立筑波大学附属高校です。高校の風土は受験勉強のための勉強というムードは薄かったそうです。ご自身は自分で自由な勉強をするタイプだったようで、進学塾なども行かなかったそうです。その勉強法、何よりも参考書選びにとっても気をつけていたそうで、自分が知っている中で一番大きな本屋さんへ行き、教科書のすでに習ったページを広げ、その記述が書いてある参考書を片っ端から並べて、最も網羅的に書いてあるものを選んだそうです。そして自分が納得して選んだその参考書を、何十回も、教科書によっては100回以上も繰り返し読むのだそうです。1回で読み込んでしまうのではなく、繰り返し読むことで、毎回新しい発見がその中にあるそうです。

まわりの生徒たちの勉強法にも個性があって、自分に教えるようにしゃべりながら勉強をしている子もいれば、様々だったようです。つまり、みんな自分に合った勉強法を見つけながら、その方法を信じてやり抜くことが、受験勉強も含めて勉強には大切なことだそうです。それを身をもって体験されたからこそ、今の山口さんがいるのですね。

山口さんは子どもの頃からなぜそんなに本が好きだったのでしょうか。

ご両親は、彼女が小学校へ入る前、絵本を何度も繰り返し読んでくれたそうです。ご両親が創作された童話を聞かせてくれたそうです。小学校時代はファンタジーがすきになり、『はてしない物語』が好きだったそうです。これが物語の世界が好きになった原点になっているのですね。困難を乗り越えて冒険の旅を続ける主人公に自分を重ねていたそうです。本を読んでファンタジックな世界を自由にさまよい、読み終わると、さあ現実の世界と向かい合おうという感じだそうです。山口さんの幼少期、素敵だと感じました。

私はここ最近、この数年の間に、ますます「語彙」の大切さを感じるようになりました。中学生以上の子どもたちに、「ことばノート」作成を促しています。ことばは声だけで、または文字だけで、目の前の人のここを感動させることのできる、唯一人だけが持つ特許のようなものです。ことばは選び方ひとつで、人生が変わってしまうくらいに大きな存在です。ことば、つまり語彙の海は本へと成長します。山口さんは毎日語彙の海の中で泳ぐわけですから、自然、ことばが空気のような存在になっていきます。どこにでも当たり前のように漂っているもの……。

山口さんは高校生時代に以下のような本を好んだそうです。「ディック・フランシスやフレデリック・フォーサイスなどの論理的な文章に引き込まれました。行間とか余韻とかではなくて、描写が細かいんです。『この人はこういう人であった』と書かないで、細かい事実を積み重ねることで、その人の全体像を描き出す文章の書き方が好きでした」そうです。恥ずかしいことに、私はこのお2人を知りません。

自分の生き方を信じてどこまでもやり抜くこと、誰が何を言おうと自身が信じた道で、方法で、歩んでみること。そこには失敗だとか成功だとか小さく見えてしまう世界が広がっているようです。

さあ、答えのない問題に向かってみましょう。何時間でも……。そしてことばの海で泳ぎましょう。